

高松市埋蔵文化財調査報告第28集

高松南部農業協同組合林支所
建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

空港跡地遺跡（亀の町地区Ⅱ）

1995. 3

高松市教育委員会
高松南部農業協同組合

空港跡地遺跡 亀の町地区Ⅱ 正誤表

頁	行	誤	正
はじめに	12	上梓させていたたせく	上梓させていただく
	22	山口寮式	山口寮弑
1	21	同年7・8月	同年10・11月
11	第7図	スケール 1m	50cm
21	4	暗黄褐色シルト質局細砂	黄灰褐色シルト質極細砂
34	2	かののまちちく に	かめのまちちく に

は　じ　め　に

現在、林町の空港跡地で整備が進められている香川インテリジェントパークは、太田第2土地区画整理事業、高松東道路ならびに四国横断道整備促進事業などとともに、高松南郊の都市整備の大きな柱の一つであり、すでに県立図書館などいくつかの施設が開設され、数年前の田圃地帯の中の滑走路の風景とは隔世の感がございます。

また、ここ林地区は、過去におきましてもいくたびかこのような大きな変貌を強いられているようです。

たとえば、もう半世紀も昔のこととなりましたが、太平洋戦争も末期の昭和19年の林飛行場建設は年輩の方々には記憶に鮮明なところと存じます。そしてさらに遡りますれば、8世紀の条里制施行、紀元前2世紀頃の水稲耕作の導入など。これらは、人の耳目に頼るべくもなく、文書史料として残っているものも限られるため、発掘調査によって知見の多くを得るわけですが、今回上梓させていたたせ「空港跡地遺跡（亀の町地区Ⅱ）」も、弥生時代、平安時代の土地開発の一端を垣間見せてくれます。

私たちが日々の生活をおくっている足元から過去のそれぞれの時代の社会の仕組みや人々の生活を、文字どおり、掘り起こしていく発掘調査。根気と忍耐の所産とよく称されますが、その最たるもの、やはり現場の作業員さんのご苦労に勝るものはないと存じます。最後になりましたが、連日の酷暑の中、しかも給水制限下で作業に従事していただいた方々を始め、調査の実施にご理解とご協力を賜りました高松南部農業協同組合、その他貴重なご指導ご助言を賜りました関係各位に厚く感謝を申し上げます。

平成7年3月

高松市教育委員会
教育長 山 口 察 弐

例

言

- 1 本書は、高松南部農業協同組合林支所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、高松市林町字亀の町351番地4に所在する。
- 3 調査は、高松南部農業協同組合の費用負担によって実施した。
- 4 調査は、高松市教育委員会文化部文化振興課主事 山本英之が担当した。
- 5 本書の執筆は、第1、4章を山本英之、第2、3章を山本・松田重治が行い、編集は山本が行った。
- 6 本書挿図中の標高はすべて海拔であり、方位は磁北を示す。また、挿図の一部に建設省国土地理院発行の25000分の1地形図「高松南部」を使用した。
- 7 発掘調査、整理作業を通じて、高松南部農業協同組合、香川県教育委員会、(財)香川県埋蔵文化財調査センター、地元の方々その他関係者各位より多大なご協力、ご援助を得た。

空港跡地遺跡（亀の町地区II）発掘調査報告書

目 次

第1章 調査の経緯と経過	1
第2章 遺跡の立地と環境	2
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	3
第3章 調査の概要	6
1 調査区の位置	6
2 試掘調査結果	7
3 基本層序	8
4 遺構と遺物	11
(1) S D01	11
(2) S D02	11
(3) S D03	11
(4) S D04	13
(5) S D05	14
(6) S D06	18
(7) S B01	18
(8) S E01	18
(9) S K01	20
(10) S K03	20
(11) S K04	20
(12) S K05	21
(13) S K06	21
(14) S X01	21
第4章 調査のまとめ	23

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置と周辺遺跡分布図	第13図	S D05出土遺物実測図
第2図	調査区の位置	第14図	S D06土層断面図
第3図	試掘トレンチ配置図	第15図	S B01遺構図
第4図	基本土層図(1)	第16図	S K01土層断面図
第5図	基本土層図(2)	第17図	S K03土層断面図
第6図	遺構配置図	第18図	S K04土層断面図
第7図	S D02土層断面図	第19図	S K05土層断面図
第8図	S D03土層断面図	第20図	S K01・05出土遺物実測図
第9図	S D03出土遺物実測図	第21図	S K06土層断面図
第10図	S D04土層断面図	第22図	S X01土層断面図
第11図	S D04出土遺物実測図		
第12図	S D05実測図		

図 版 目 次

図版1	調査前全景（北より） 基本土層（第8 Tr北壁）	図版8	S D03出土遺物
図版2	S D01完掘状況（南より） S D02～04完掘状況（東より）	図版9	S D04出土遺物(1) S D04出土遺物(2) S D05出土遺物(1)
図版3	S D04土層断面 S D05完掘状況（南西より） S D05完掘状況（北東より）	図版10	S D05出土遺物(2) S K01出土遺物
図版4	S D05遺物出土状況 S B01完掘状況（東より）		
図版5	S K01土層断面 S K05土層断面		
図版6	S K06土層断面 S E01完掘状況		
図版7	S X01完掘状況 作業風景（完掘撮影前清掃）		

第1章 調査の経緯と経過

平成元年12月の高松新空港開設に伴い閉鎖となった高松空港跡地は、平成3年度から工業試験場、県立図書館、大規模見本市会場、民間企業の技術施設等を集積する香川インテリジェントパークとして整備が進められ、平成5年度以降順次新施設が開設されつつある。

これら空港跡地の再開発区域周辺は、高松平野中央部の田園地帯で条里制の地割がよく保存されていることで知られるとともに、近隣の高松東道路建設、太田第2土地区画整理事業等に伴う埋蔵文化財調査の結果から、歴史的な価値がより注目されている地域でもある。その中であって、空港跡地の部分は、飛行場建設のために埋蔵文化財の遺存は疑問視され、遺跡の空白地帯とされてきたが、(財)香川県埋蔵文化財調査センターによる再開発に伴う事前調査によって、弥生集落、中世館跡、条里関連遺構等が滑走路の下から続々と発掘され、空港跡地遺跡として大規模な調査が実施されてきた。

一方高松南部農業協同組合では、現在、太田第2土地区画整理事業区域内に所在する農協林支所の、同事業施工に伴う移転先として林町字亀の町351番地4を計画し、予定地が空港跡地遺跡に含まれることから、支所建設に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて高松市教育委員会に照会した。これを受けて高松市教育委員会では、平成6年6月8日～25日に試掘調査を実施し、ほぼ全域が埋蔵文化財包蔵地であることを確認した。

このため、高松南部農業協同組合と高松市教育委員会の二者で協議を重ね、地下遺構に影響が及ぶ管理棟予定地約500㎡（最終調査面積800㎡）について、高松南部農業協同組合が費用を負担し、高松市教育委員会が発掘調査を実施することを内容とする協定書を、平成6年8月9日付けで締結した。

発掘調査は平成6年8月9日に着手し、9月22日をもって現地調査を完了した。そして同年7・8月で引き続き整理作業を実施し調査報告書の作成にあたった。

第2章 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

高松平野は、香川県のほぼ中央部で瀬戸内海沿岸に位置する沖積平野で、西を五色台山塊、南を日山、上佐山、東を立石山、雲附山等に遮られており、南北約20km、東西約16kmを測る。

平野の境界を画する低位山塊及び尾島、紫雲山等の島状の独立丘陵は、侵食の容易な花崗岩層（二豊層群）が風化侵食に抵抗の強い安山岩層に覆われたことによって侵食解析から取り残されて形成された、メサ、またはビュートと呼ばれるもので、讃岐のどかな田園風景の象徴のひとつとなっている。

高松平野には、西から本津川、香東川、春日川、新川といった河川が北流しているが、なかでも香東川が平野の形成に最も大きな影響を及ぼしており、現在の春日川以西が香東川による沖積平野といわれている。

現在、石清尾山塊の西側を直線状に北流する香東川は、17世紀はじめの河川改修によるもので、それ以前には石清尾山塊の南側から回り込んで、平野中央部を東北流するもう一本の主流路が存在していた。この旧流路は、現在では水田地帯及び市街地の地下に埋没してしまっているが、空中写真等から、林から木太地区にかけての分ヶ池、下池、長池、大池、ガラ池を結ぶ流路等数本の旧河道が知られており、発掘調査でもその痕跡が確認されている。なお、17世紀の腕川直前の流路は、御坊川として今でもその名残をとどめている。

これらのため池は、年間1000mm前後と降水量に乏しい讃岐平野において農業用水確保のために不可欠のものであるが、林、多肥地区周辺では扇状地末端部にあたることから、ため池に加えて出水と呼ばれる自噴地下水脈の利用が盛んで、両者を併用した特徴的な配水網と厳格な水利慣行を伝えてきた。しかし、昭和50年の香川用水の通水によって、この一帯は三郎池の受益範囲に取り込まれ、農業用水確保の不安が払拭された反面、大池、長池等のため池が三郎池の子池となり、地元水源を核とした水利慣行が急速に消滅するとともに、ため池や出水の水源自体もその役割を失いつつある。

本書に報告する空港跡地遺跡は、香東川沖積地の東辺に位置し、春日川支流の古川の西方約400mに位置する。現海岸線から内陸に約5km、南南東約1.5kmに由良石で有名な由良山を仰ぐ。周辺は、旧空港施設を除けば田園地帯で条里地割をよく保存するが、旧空港南側から由良山の西にかけての一帯は昭和18年の軍用飛行場建設に伴う接収地を戦後解放して再区画された圃場であるため、条里地割とは異なった水田区画をなしている。

2 歴史的環境

現在知られている高松平野の遺跡は、その最古のもので縄文時代草創期であり、木太新池の池底(木太町)で有舌尖頭器が2点採集されている⁽¹⁾。しかし、縄文時代全般を通じて集落の存在は知られておらず、出土遺物の多くは自然河川からの一括遺物である。林・坊城遺跡(林町)では晩期の自然河川中より木製農耕具が出土しているが、このことはこの近接地に集落の存在、並びにこの時期の農耕を想起させるものである⁽²⁾。

弥生時代前期に入ると、浴・長池Ⅱ遺跡(林町)の例のように規則的な水田を営むところも現れる⁽³⁾。同様な水田は浴・長池遺跡(林町)⁽⁴⁾、弘福寺領讃岐国山田郡田岡比定地遺跡(林町)⁽⁵⁾でも検出されており、これらは概ね弥生時代中期以前と推定されている。

本遺跡に南接する空港跡地遺跡(林町)が出現するのが弥生時代前期末である。この時期の遺構は自然河川と廃棄土坑及び貯蔵穴の機能を有したと考えられる上坑、溝が存在する。また、遺物の出土はないが当該時期に属する可能性のある円形竅穴住居が検出されている⁽⁶⁾。

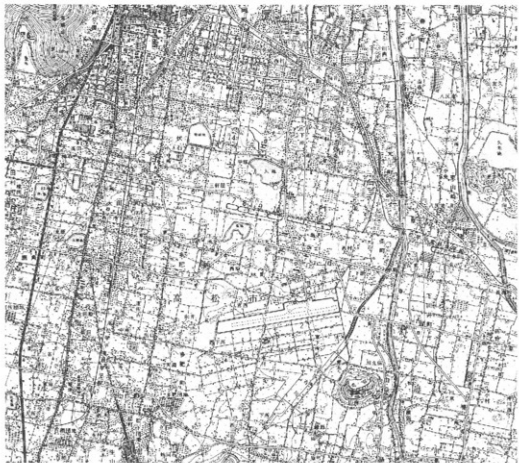
中期に入ると凹原遺跡(多肥下町)⁽⁷⁾、浴・長池遺跡等で竅穴住居が検出されている⁽⁸⁾。また、井手東Ⅰ遺跡(伏石町)では当該時期の自然河川中より木製農耕具、弓、琴などが出土している⁽⁹⁾。空港跡地遺跡では中期後半の遺構として溝状遺構・土坑が検出されている⁽⁶⁾。

本遺跡の属する弥生時代後期になると高松平野における遺跡数は増加する。本遺跡周辺においても多くの集落の存在が確認されており、中でも空港跡地遺跡においては大規模な集落が営まれていた。また、この集落とほぼ同時期と考えられる墳墓域がこの近接地に存在している⁽⁶⁾。

弥生時代後期後葉から古墳時代前期にかけても空港跡地遺跡においては同様な傾向がみられる。ここでは前述の墳墓域において、規模は小さいながらも前方後円形並びに前方後方形周溝墓が造営されていることである。このことは比較的大きな勢力を持った首長層が当地に存在したことを想起させるものである。また、同時期の溝中より全体的にもあまり例のない人形土製品が出土している⁽⁶⁾。

高松平野中央部における弥生時代後期から古墳時代前期のその他の遺跡は、後期初頭の上天神遺跡(上天神町)⁽⁹⁾、後期前半の太田下・須川遺跡(太田下町)⁽¹⁰⁾、後期後半から末にかけての凹原遺跡⁽⁷⁾、天満・宮西遺跡(松縄町)⁽¹¹⁾が集落として知られている。また、浴・松ノ木遺跡(林町)において水田や榎状木製品が⁽¹²⁾、居石遺跡(伏石町)においては弥生時代後期末から古墳時代前期初頭と考えられる3枚の小型仿製鏡がそれぞれ自然河川中より出土している⁽¹³⁾。

古墳時代中期から後期にかけての遺跡数は少なく、太田下・須川遺跡で5世紀後半から6世紀前半の竅穴住居及び堀立柱建物⁽¹⁰⁾、また空港跡地遺跡で5世紀末から6世紀初頭の集落が検出された程度である。ところが、ここでは今まで県内で明らかにされていなかった同時期の土器群が



第1図 遺跡の位置と周辺遺跡分布図 (縮尺 1/5,000)

- | | |
|------------|----------------------|
| 1 本遺跡 | 11 林・坊城遺跡 |
| 2 空港跡地遺跡 | 12 東山崎・水田遺跡 |
| 3 拝師庵寺 | 13 天満・宮西遺跡 |
| 4 上天神遺跡 | 14 松縄下所遺跡 |
| 5 太田下・須川遺跡 | 15 弘福寺領讃岐国山田郡田岡比定地遺跡 |
| 6 磨石遺跡 | 16 凹原遺跡 |
| 7 井手東1遺跡 | 17 空港跡地遺跡 (電の町地区 I) |
| 8 浴・長池II遺跡 | |
| 9 浴・長池遺跡 | |
| 10 浴・松ノ木遺跡 | |

遺物包含層及び竪穴住居内で一括出土している。これによってこの時期の土器の資料が新たに提供された⁽⁶⁾。

古代になると、数カ所で条里型地割と合致する主軸方位を採る溝が検出されている。

松縄下所遺跡(松縄町)では条里制施行に関連する可能性のある7～8世紀頃の幹線道路状遺構が検出され⁽¹⁴⁾、太田下・須川遺跡では自然河川より平安時代の土器とともに甕串、人形、櫛が出土している⁽¹⁵⁾。また、本遺跡から約200m南に拝師庵寺(林町)があり、ここで八葉単弁蓮花文軒丸瓦が出土したほか、七葉複弁蓮花文軒丸瓦も採集されている⁽¹⁵⁾。

中世、近世においては古代からの大きな変化はそれほど認められない。この時期の集落の存在としては空港跡地遺跡、東山崎・水田遺跡(東山崎町)が知られている。

空港跡地遺跡では12世紀後半の溝状遺構や棚列で区画された小集落、13世紀代の約1町四方の区画溝をもつ集落、また18世紀代の遺物を含む、条里型地割と合致する1町方格の溝などが存在する⁽⁶⁾。

東山崎・水田遺跡では掘立柱建物や井戸を検出したほか、近世の屋敷跡の可能性のある、溝状遺構に囲繞された掘立柱建物が検出されている⁽¹⁶⁾。なお、本遺跡を含む空港跡地周辺は昭和19年の林飛行場造成に伴ってその地割が大きく変化し、現在に至っている。

- (1) 丹羽佑一・藤井雄三『高松の古代文化』1989
- (2) 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター『林・坊城遺跡』1993
- (3) 高松市教育委員会『浴・長池II遺跡』1994
- (4) 高松市教育委員会『浴・長池遺跡』1993
- (5) 高松市教育委員会『讃岐国弘福寺領の調査』1992
- (6) 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター『空港跡地遺跡発掘調査概報』1992・1993・1994
- (7) 高松市教育委員会『周辺部の調査 凹原遺跡』『讃岐国弘福寺領の調査』1992
- (8) 高松市教育委員会『井手東I遺跡』1995
- (9) 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター『上天神遺跡』『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報 1988年度』1989
- (10) 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター『太田下・須川遺跡』1995
- (11) 高松市教育委員会『周辺部の調査 天満・宮西遺跡』『讃岐国弘福寺領の調査』1992
- (12) 高松市教育委員会『浴・松ノ木遺跡』1994
- (13) 高松市教育委員会『周辺部の調査 居石遺跡』『讃岐国弘福寺領の調査』1992
- (14) 高松市教育委員会『周辺部の調査 松縄下所遺跡』『讃岐国弘福寺領の調査』1992
- (15) 安藤文良『讃岐の古瓦図録』『文化財協会報』第8号 1967
- (16) 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター『東山崎・水田遺跡』1992

第3章 調査の概要

1 調査区の位置 (第2図)

遺跡は、高松平野のほぼ中央部に位置する。東側はわずかつつ標高を減じながら、約250mで春日川の支流である古川に至り、西側は約1.3kmで香東川の旧河道に達する、比較的大きな微高地上にあたる。地形的には香東川による扇状地面の東縁にあたると考えられる。南約1kmには独立山塊である由良山を望む。

調査地点は、昭和19年に陸軍林飛行場用地として強制収容された範囲に含まれる。林飛行場は戦後、旧高松空港を除き再び水田として民間に払下げられたが、この際に圃場整備が施されている。このため旧林飛行場の地割は、条里地割の残存する周辺平野部とは異なったものとなっている。

近年まで旧林飛行場の範囲内は、空港造成によって地下遺構の遺存はないものと考えられてきたが、高松空港移転後の再開発事業に先立つ発掘調査において多くの遺跡が破壊を免れていたことが確認された。本遺跡は旧林飛行場用地の北東隅に位置し、現況是水田となっている。

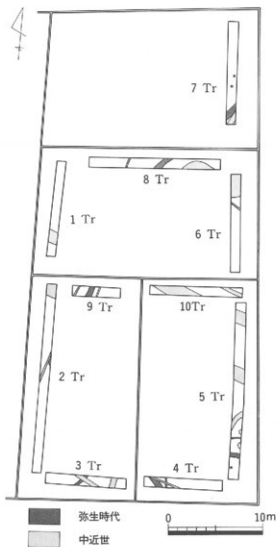


第2図 調査区の位置

2 試掘調査結果 (第3図)

試掘調査では調査対象地を囲う形で10本のトレンチを設定し、全体の土層堆積と遺跡の分布状況を確認した。本調査を実施したのはこの内の北西隅の一角約800㎡である。

試掘調査の結果、対象地は全体が微高地の上に乗っており、粗密の程度はあるものの、ほぼ全域で遺構が検出できた。遺構は、弥生時代後期と考えられる黒褐色シルト質細砂埋土のものと、中～近世から近代の白灰色シルト質極細砂埋土の2時期に分類でき、溝、ピット、土坑などがみられる。



第3図 試掘トレンチ配置図

まず、弥生時代後期のものについては、南西から北東に向かう溝状遺構が複数のトレンチにまたがって確認できた。一方、中近世の溝状遺構では東西または南北の正方位に近い直線溝が、対象地南半部に集中して何本も交差しており、条里地割に規制された水路または区画溝の存在が予想できた。また、部分的に柱穴跡や集石土坑もみられ、中近世の建物跡等の可能性も考えられる。

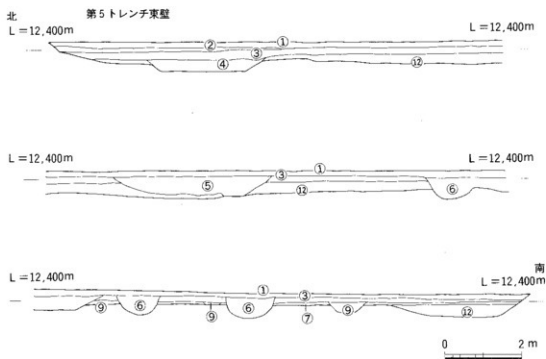
3 基本層序 (第4・5図)

調査区の基本層序は、主に試掘調査のデータによった。

基本層序は、微高地上のほぼ平坦な堆積で6層に分層することができる。上層から現耕水田層(第4図第1層)、近現代の客土層(同図第2層)、近世の耕土層である白灰色シルト質極細砂層(同図第3層)、最終遺構面の明黄褐色粘土層(同図第4層)、褐灰色シルト質極細砂層(同図第5層)、褐灰色細砂層(同図第6層)の順である。調査区の北東側では第3層が薄く、現水田の下層で地山となっているが、西側では地山がわずかに低くなっているため、1～4層が比較的厚く堆積している。

また、第4層の上面を削平しながら南西から北東に流れる幅約10mの自然流路堆積層として、黒灰色粗砂～細礫層(第7層)、黒褐色シルト質極細砂層(第8層)が存在する。

遺構の検出面は、第2層及び第3層上面の2面で、前者が中近世から現代、後者が弥生時代の遺構面である。この第7層の上面に自然流路と同方向に弥生時代後期の溝状遺構(SD06)が存在することから第7層以下は弥生前期以前の堆積と考えられる。

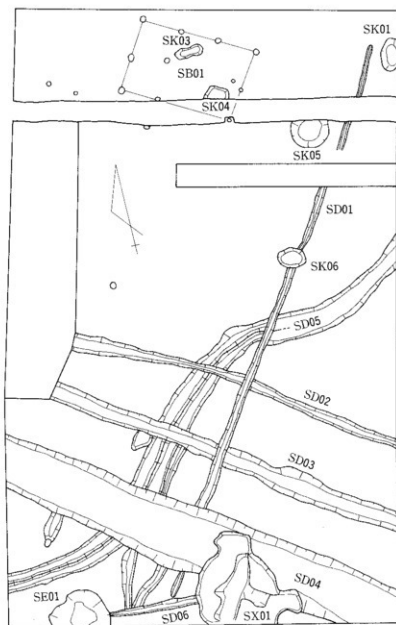


第4図 基本土層図1)



- ① 埋立土
 ② 灰色シルト質硬細砂 (2.5Y7/1)
 ③ 灰色シルト質硬細砂 (10YR7/3) } 混雑
 ④ にくい黄褐色シルト質硬細砂 (5Y6/1)
 ⑤ 灰色シルト質硬細砂 (5Y6/1)
 ⑥ 灰色シルト質硬細砂 (5Y6/1) (灰白色・明黄褐色土をブロック状に含む)
 ⑦ 黄灰色シルト質硬細砂 (10YR5/1) c層
 ⑧ 黄灰色シルト質硬細砂 (7.5YR3/1)
 ⑨ 黄褐色シルト質硬細砂 (7.5YR5/2)
 ⑩ 黄褐色シルト質硬細砂 (5とほぼ同)
 ⑪ 明黄褐色粘土 (ベース)
 ⑫

第5図 基本土層図(2)



第6図 遺構配置図

4 遺構と遺物

概況

調査区全体が削平されており、現耕作土直下の黒褐色シルト質極細砂層及び黒灰色砂層が遺構面である。調査区全体としては北東から南西方向に向かって緩く傾斜している。検出した遺構は溝6本、土坑8、掘立柱建物1棟、ピット6、井戸1である。

SD01 (第6図)

調査区北東隅から南端中央に一直線に伸びる溝である。主軸方位を $N-20^{\circ}-E$ にとり、現地表の推定条里地割の南北坪界線からやや東に斜行し、位置的には坪界中線にほぼ一致する。幅40~50cm、深さ1.5~5cmを測り、殆ど溝底付近まで削平が及んでいる。南北両端はいずれも調査区境界付近で途切れており、検出延長距離は約30mである。埋土はシルト質極細砂で、直交する3本の溝状遺構との切り合い関係からSD02、03より後出、SD04よりも先行することが確認できる。遺物は確認できなかったが、近世以降のものと推測される。

SD02 (第6・7図)

SD02はSD03の北側に心間で約4mの距離をおいて平行に走る溝である。東端が僅かに南へ向かって反った形になっているため、東端でのSD03との間隔は3mとやや狭くなっている。溝幅40cm、深さ15cmを測る。埋土はSD03と同様上層は暗褐色灰色シルト質極細砂、下層は黄褐色粗砂礫層である。遺物は確認されていない。

L=12,500m



0 1m

- ① 黄灰褐色シルト質極細砂
- ② 暗黄灰色砂質シルト
黒褐色砂質シルト } 混濁土

第7図 SD02 土層断面図

SD03 (第6・8図)

SD03は溝の主軸方位 $N-63^{\circ}-W$ 、深さ約20cm、幅約80cmを測る直線溝である。埋土は上下2層に分かれ、上層は暗褐色灰色シルト質極細砂、下層は黄褐色粗砂礫層である。レベルは僅かに西に向かって傾斜し、流れの方向も東から西に向かっていたと思われる。

L=12,500m



0 1m

第8図 SD03 土層断面図
(土層注記はSD02に同じ)

SD03を東調査区外へ延長した線上には、現在も幅2~3mの水田畔畔と里道が存在しており、SD03がこの北側辺に沿うことが地形図から確認できるとともに、このラインは現地表の推定条里地割の里界線と一致している。このことから、SD03はSD02またはSD04と対になって、昭和19年の軍用飛行場接収前までの土地区画をなしていたことが考えられる。

出土遺物に黒色土器碗が見られることより最終埋没は12世紀後半と推定される。

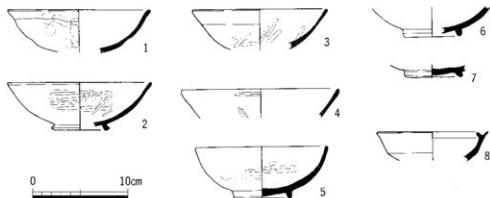
出土遺物 (第9図)

(1)は口径15.2cm、残存高4.6cmを測る和泉系瓦器碗である。内面の調整は不明であるが、外面には指頭斥痕のちナデを施す。色調は外面黒色(5Y2/1)、内面灰白色(5Y8/1)である。(2)は黒色土器A類・碗である。口径15.4cm、器高5.0cmを測り、底部には粘土紐状の高台が付く。内外面ともヘラミガキが顕著に残り、黒色(5Y2/1)を呈する。

(3)~(7)は瓦質土器杭である。(3)は口径14.4cm、残存高4.1cmで、調整は内外面にヘラミガキを施す。色調は内外面ともに黒色(2.5Y2/1)を呈する。(4)は口径16.6cm、残存高3.0cmを測り、内面の調整は磨耗が著く不明であるが、外面にはヘラミガキがわずかに残る。内外面とも黒色(5Y2/1)を呈する。(5)は口径14.0cm、器高5.4cmで底部にはしっかりした高台が付く。外面黒灰色(2.5Y3/1)、内面黄灰色(2.5Y6/1)を呈する。(6)は底径5.8cm、残存高3.1cmで底部にはしっかりした高台が付き、外面灰白色(2.5Y8/2)、内面灰黄色(2.5Y7/2)を呈する。(7)は底径6.2cm、残存高1.3cmを測る底部であり、色調は内面灰白色(2.5Y7/1)、外面灰白色(2.5Y8/1)である。調整は磨滅のため不明である。

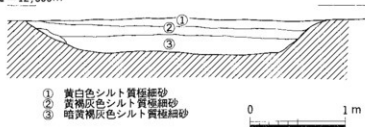
(1)~(7)はいずれも胎土に1mm以下の長石を含み、焼成は良好である。

(8)は須恵器の坏身である。最大径11.8cm、残存高3.0cmを測り、内外面とも明青灰色(5PB7/1)を呈する。胎土に1mm以下の長石を大量に含み、焼成は良好である。(8)は混入品であり、(1)~(7)からSD03の時期を設定するならば、概ね12世紀後半頃が与えられる。



第9図 SD03 出土遺物実測図

L = 12,500m



第10図 SD04 土層断面図

SD04 (第6・10図)

SD04は、SD03の南側に約5mの間隔をもって併走する。溝幅3.3m、深さ35cmを測る。埋土は3層に分かれ、上層から黄白色シルト質極細砂、黄褐色シルト質極細砂、暗黄褐色シルト質極細砂である。明石産の播鉢等の出土から最終埋没は出土遺物より18世紀後半頃と推定される。

出土遺物 (第11図)

(1)は陶器の碗である。口径8.8cm、残存高4.1cmを測り、内外面に釉を施す。色調は両面とも灰白色 (2.5GY8/1) を呈し、焼成は良好である。

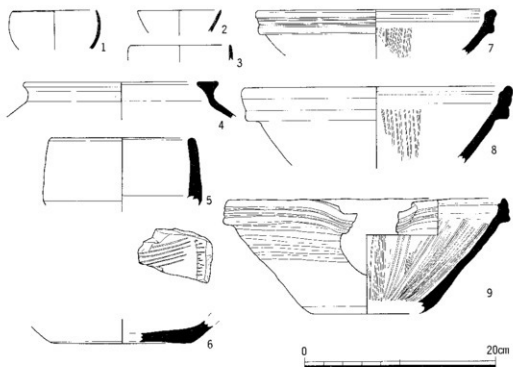
(2)・(3)は瀬戸美濃碗である。(2)は口径8.8cm、残存高2.3cm、(3)は口径10.6cm、残存高1.6cmを測り、どちらも内外面ともに釉を施す。色調は(2)は内外面とも灰白色 (2.5GY8/1) であり、(3)が外面灰白色 (2.5GY8/1)、内面灰白色 (5GY8/1) を呈する。焼成はともに良好である。(4)は口径20.4cm、残存高3.8cmの陶器・甕である。外面黒褐色 (2.5YR3/2)、内面灰オリーブ色 (5Y5/3) の色調を呈し、1mm以下の長石を胎土に含む。焼成は良好である。

(5)は口径15.0cm、残存高7.0cmの備前系陶器である。器種は不明であるが、深鉢か建水であるかもしれない。色調は外面暗褐色 (7.5YR3/4)、内面暗赤褐色 (2.5YR3/6) で胎土に1mm以下の長石、石英を含む。焼成は良好である。

(6)～(9)は播鉢である。(6)は底径14.0cm、残存高2.4cmを測る底部である。内面下部に7条1束の風車状の播目、外面に焼台痕が顕著に残る。色調は外面赤色 (10R5/8)、内面赤色 (10R4/8) を呈し、1mm以下の長石、石英を胎土に含む。焼成は良好である。播目の特徴、焼台痕から明石の所産である。(7)は口径24.8cm、残存高4.7cmを測り、体部外面にヘラケズリが観察できる。外面にぶい赤褐色 (7.5R5/3)、内面赤褐色 (10R6/4) を呈し、胎土に0.5mm以下の長石・石英を含む。焼成は良好である。(8)は口径28.0cm、残存高8.1cmを測り、体部外面に横方向のヘラケズリが見られる。内面には使用による磨滅が認められるものの8条1束の播目が顕著に残存する。外面は淡褐色 (5YR8/4)、内面は橙色 (2.5YR6/6) を呈し、胎土には1mm以下の長石を含んでいる。焼成は良好である。明石もしくは堺の所産である。

(9)は口径29.6cm、器高12.0cmを測り、外面にヨコナデ、内面に使用による磨滅が認められるものの7条1束の濡り目が顕著に残存し、また片口を持つ。色調は外面暗赤褐色(10R3/6)、内面極暗赤褐色(10R2/2)を呈し、焼成は良好である。口縁端部上及び下面に重ね焼きの痕跡が認められることから備前焼と考えられる。

SD04の年代は、出土遺物中最も新しいと考えられる明石産の播鉢から概ね18世紀後半頃が与えられる。

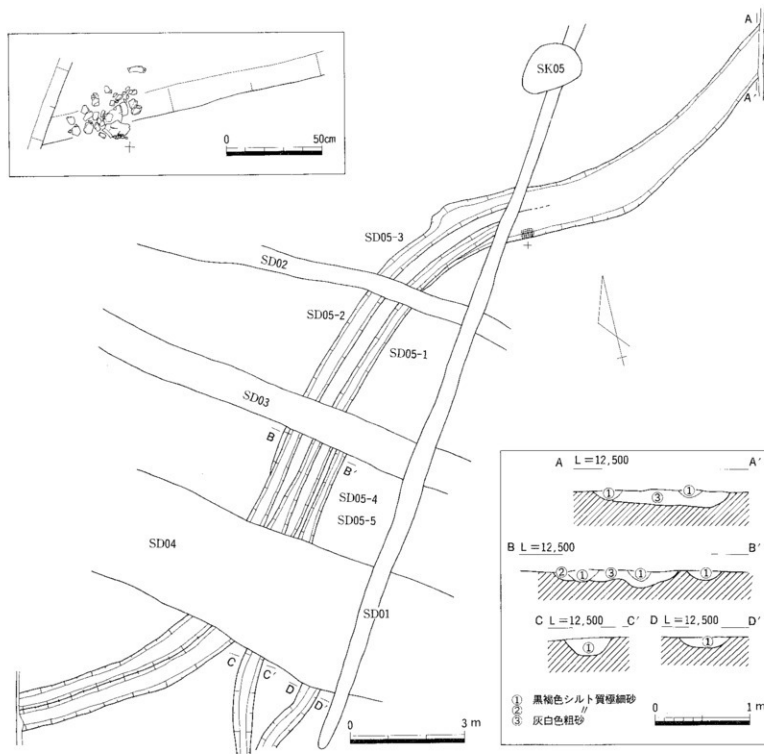


第11図 SD04 出土遺物実測図

SD05 (第12図)

調査区東辺中央やや北寄りから南西方向に蛇行しながら延びる溝である。出土遺物より古墳時代前期に属するものと考えられる。出土遺物には土器の他に石鏃1点、岩製石斧1点がある。

SD05は一旦洪水によって埋没したあと、その直上に2本の溝が再掘削されている。東側のものをSD05-1、西側のものをSD05-2とし、それに先行するものをSD05-3とした。

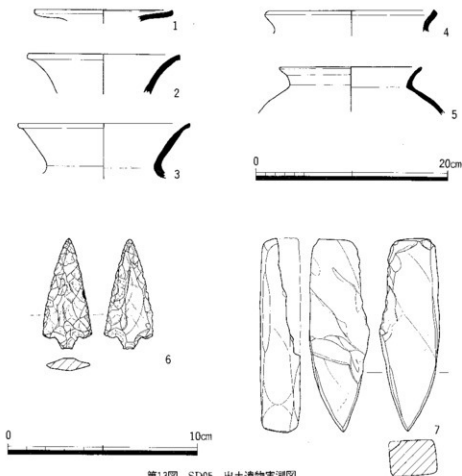


なお、SD03・04との交点付近でSD05-1・05-2に先行する2本の溝の存在が確認され、これをSD05-4・05-5とした。ともにSD03以南では平面で検出できたが、以北では平断面ともに明瞭に確認できず、また、途中SD04によって切られているためにその南北での対応関係は不明である。

埴土はSD05-1・05-2・05-4・05-5とともに黒褐色シルト質極細砂、SD05-3は褐灰色・灰白色・黄褐色の細砂がラミナ状に堆積する洪水層である。それぞれの切り合い関係ならびに埴土からこれらの溝にはそれほど時期差はないと思われる。

出土遺物 (第13図)

(1)～(3)は壺である。(1)は口径14.6cm、残存高1.2cmを測る。内外面とも磨耗が著しいが、内面に僅かにナデが見られる。外面明褐色(7.5YR5/6)、内面にぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、胎土には0.5mm以下の長石、雲母を含む。焼成は良好である。(2)は口径16.2cm、残存高4.1cmを測る。内外面とも磨滅が著しいため調整等は不明であり、胎土には3mm以下の長石を大量に含む。



第13図 SD05 出土遺物実測図

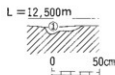
焼成は良好である。(3)は口径18.2cm、残存高5.7cmを測り、外面橙色(7.5YR7/6)、内面におい橙色(7.5YR7/4)を呈する。(4)、(5)は甕である。(4)は口径17.6cm、残存高2.2cmを測り、調整等は磨滅のため不明である。外面黄褐色(2.5Y5/4)、内面黄褐色(2.5Y5/6)を呈し、胎土には0.5mm以下の長石を含み、焼成は良好である。(5)は口径15.0cm、残存高4.7cmを測り、外面明褐色(7.5YR5/8)、内面褐灰色(7.5YR4/1)を呈する。胎土には0.5mm以下の長石を含み、焼成は良好である。

(6)は全長5.8cm、最大幅2.5cm、最大厚0.8cmを測る石鏃である。(7)は全長10.2cm、最大幅3.0cm、最大厚2.1cmの磨製石斧である。先端には使用によると思われる刃こぼれが見られる。(6)はサヌカイト製、(7)は絹雲母片岩製である。

出土土器よりSD05は古墳時代前期(布留古段階並行)の所産である。

SD06 (第6・14図)

調査区南端に検出された幅約40cm、深さ約5cmの東西に延びる溝である。西端をSE01、東端をSX01に切られている。出土遺物はない。黄灰褐色シルト質極細砂の埋土をもつ。



① 黄灰褐色シルト質極細砂
第14図 SD06 土層断面図

SB01 (第15図)

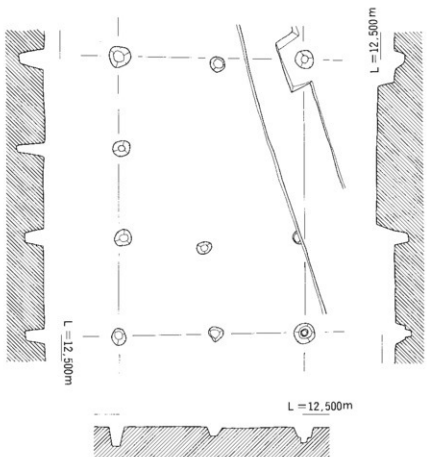
SB01は調査区北側に検出された2間×3間の掘立柱建物である。東から2列目梁行の中間穴を欠損し、同じく2列目の南柱穴が未検出であるが、11穴によって構成されるものと思われる。柱間は桁行、梁行とも2m前後のほぼ等間隔である。柱穴はいずれも検出面で直径約40cmの円形を呈し、深さは南北両桁列については検出面から60cm前後、中間列では20cmとやや浅くなっている。

遺物は検出されていないが、埋土より近世末頃から明治以降に建てられた、ごく新しいものであると考えられる。

SE01 (第6図)

SE01は井戸状遺構である。平面は不整の隅丸方形を呈し、検出面での一辺約2.8m、底面は一辺1.5m弱の不整隅丸三角形、深さ約65cmを測り、全体として鍾鉢のような形状をしている。井開の存在は認められなかった。出土遺物が皆無のため時期は不明であるが、SD06との切り合いより近世後半以降の時期が推定できる。

8月中の調査でもあり、周辺の現存水路等の位置関係も影響するが、比較的湧水が豊富で放置すれば常に八分目近くまでの水位を保つ、水量の豊かな井戸である。



第15図 SB01 透視図

SK01 (第6・16図)

調査区北東隅に検出された土坑であり、東約1/3が調査区外へ逃げている。南北約1.6m、深さ0.35mを測る。埋土は2層に分けられ、上層は黄灰褐色シルト質極細砂、下層は暗黄灰色砂質シルトと黒褐色砂質シルトが混濁している。

L=12,500m

出土遺物 (第20図)

SK01からは(1)の唐津焼の大皿が1点のみ出土した。底内径9.6cm、残存高3.5cmを測り、色調は内面(釉)黄褐色(2.5Y5/3)、外面赤褐色(2.5YR4/6)を呈する。なお、内面下部に砂日積がみられる。17世紀代の所産である。



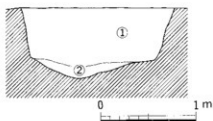
第16図 SK01 土層断面図

SK03 (第6・17図)

SB01の柱穴に囲まれて南北に並ぶ2基のうち、北側に位置する性格不明の土坑である。長軸1.5m、短軸0.5mで、中程がややくびれた落花生の葉のような平面形を有する。

L=12,500m

深さは約60cmを測り、底はほぼ平坦である。埋土は黄灰褐色シルト質極細砂の単層である。遺物は出土していないが近世から近現代にかけてのものと考えられる。



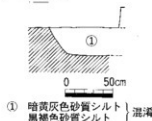
土層注記はSK01に同じ

第17図 SK03 土層断面図

SK04 (第6・18図)

SB01の柱穴に囲まれて南北に並ぶ2基のうち、南側に位置する性格不明の土坑である。ほぼ隅丸方形の平面形をもつと考えられるが、南半が調査区外に逃げている。東西の最大長1.3m、南北の現存長0.7mを測る。深さは約25cmを測り、底はほぼ平坦で断面逆台形を呈する。埋土は暗黄灰色砂質シルトと黒褐色砂質シルトがブロック状に混濁しており、ごく最近の埋め戻しと考えられるが遺物は伴出していない。

L=12,500m

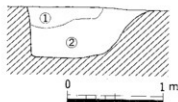


第18図 SK04 土層断面図

SK05 (第6・19図)

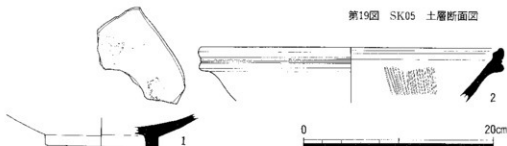
SD01の西隣、調査区の北1/4に検出された、直径約1.3m、深さ約0.5mを測る土坑である。埋土はSK01と同じく2層に分かれ、上層が暗黄褐色シルト質極細砂、下層が暗黄灰色砂質シルトと黒褐色砂質シルトの混濁である。

L = 12,500m



土層注記はSK01に同じ

第19図 SK05 土層断面図



第20図 SK01・05 出土遺物実測図

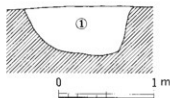
出土遺物 (第20図)

(2)は口径32.0cm、残存高5.6cmの鐙鉢である。钵部内面に12条1束の鐙り日をもち、外面及び内面にナデが残る。色調は外面にぶい赤色(7.5R4/4)、内面極暗赤褐色(7.5R2/3)を呈し、0.5cm以下の長石、角閃石を胎土に含む。口縁上端および下端部に重ね焼き痕が見られることから、備前焼と考えられる。

SK06 (第6・21図)

調査区北西寄り、SD05のすぐ北側でSD01を分断して位置する、やや東西長の楕円形の土坑である。長軸1.5m、短軸1.0m、深さは約50cmを測り、断面形はほぼ碗形を呈する。埋土は黄灰褐色シルト質極細砂の単層である。遺物は出土していない。

L = 12,500m



① 黄灰褐色シルト質極細砂

第21図 SK06 土層断面図

SX01 (第6・22図)

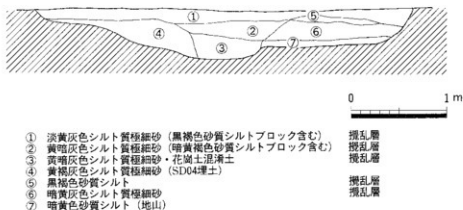
調査区南端中央やや東寄りで確認された攪乱坑である。東西約4m、南北約4m以上(推定5m)の不整楕円形の北と東側に1×1mの張り出しがとりついたような平面形をもつ。深さは、攪乱の中央部を南北に溝状に掘りくぼめられた最深部で約1.1m、攪乱縁辺部で25~60cmを測る。平面的にも立面的にも歪な形状を呈する。

埋土は5層に分層されるものの、各層にシルトブロックや花崗土が含まれている。

出土遺物としては、第二次世界大戦の際の焼夷弾の破片が1点のみ出土している。しかし、埋土の堆積状況、攪乱坑の平面プラン等から判断して、この地点で炸裂したような状況は見られないことから、残骸廃棄の際の攪乱と考えられる。

太平洋戦争末期から終戦以降の所産である。

L=12,500m



第22図 SX01 土層断面図

第4章 調査のまとめ

中世において注目すべきは、条里の里界線と推定されるSD03である。この遺構は、山田郡条里の10里と11里の里界線と一致し、最終の埋没時期は出土遺物より12世紀後半と推定される。

また、SD03の南北両側にはSD03と平行してSD02・04が存在するが、これらとSD03の関係にも注意を払う必要がある。まずSD02は、SD03と溝の心間距離で3～4mを測り、東西両端が南側に若干反り返っているものの、大局的にはSD03とほぼ平行な位置関係にあるとみなしうるものである。遺物が確認されていないが、埋土は上層暗褐色シルト質極細砂、下層黄褐色粗砂礫とSD03と同様の堆積を示している。

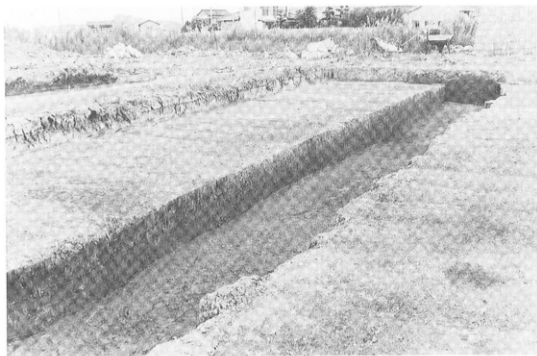
一方SD04は、幅3.3m、深さ35cmを測り、近世の遺物を伴出することから、一見SD03とは全く無関係にみられる。しかし、調査区の東側の水田においてSD03・04を両側として延長した線上に現在も畦畔が存在しており、この水田が昭和19年の高松空港造成時の土地改変を受けていないことからSD03・04はこの痕跡を残す遺構であると考えられるのである。

SD03の埋没時期からすると、現在の地表面で読みとれる条里地割は、少なくとも12世紀までに形成され、それ以降は大規模な区画の再編成がないまま現在に至っていることが推定される。その一方で、SD02がSD03と同様な埋土をもち、SD04がSD03と対になって現在の水田区画につながっていることから、土地区画の大枠は保ちながら畦畔、水路等の構造物は時代時代で移動を繰り返していたことが考えられる。

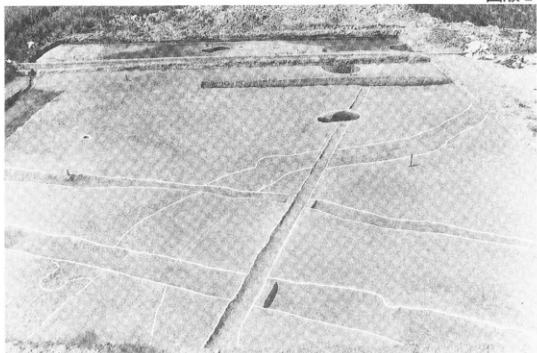
図版 1



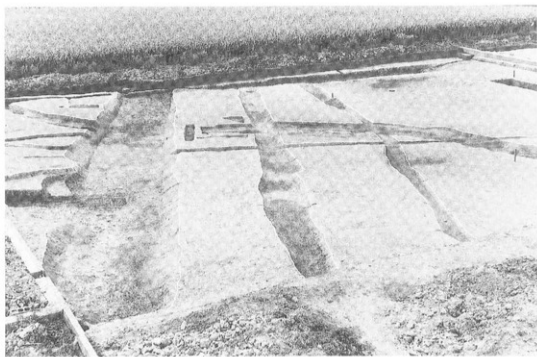
調査前全景（北より）



基本土層（第8 Tr 北壁）

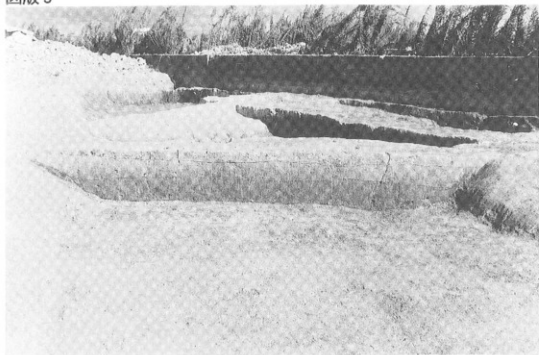


SD01 完掘状況 (南より)



SD02~04 完掘状況 (東より)

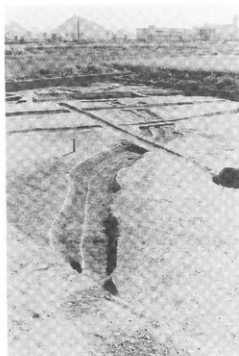
図版 3



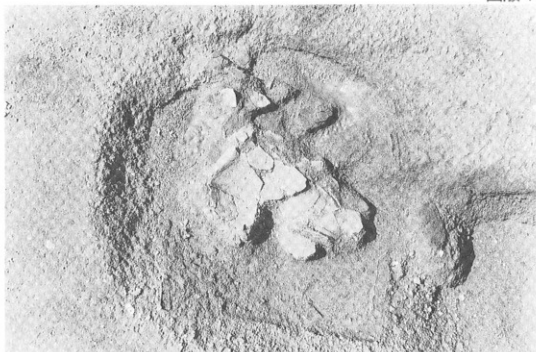
SD04 土層断面



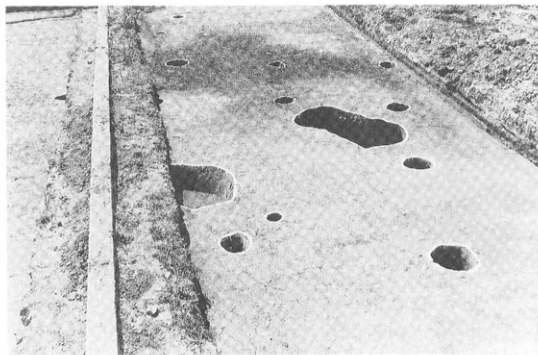
SD05 完掘状況 (南西より)



同左 (北東より)

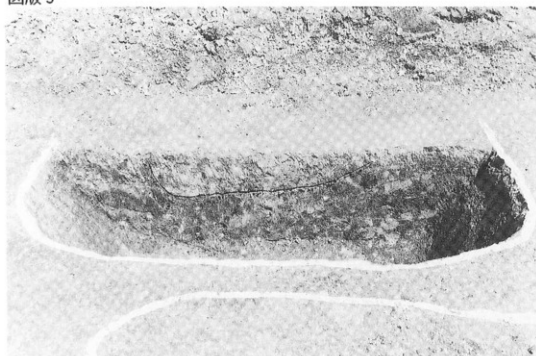


SD05 遺物出土状況

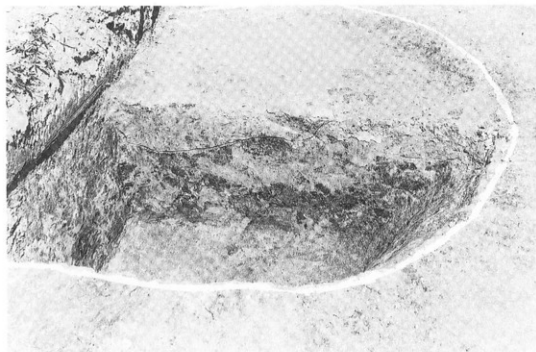


SB01 完掘状況 (東より)

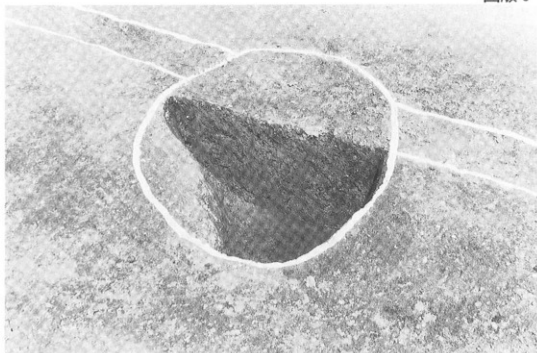
図版 5



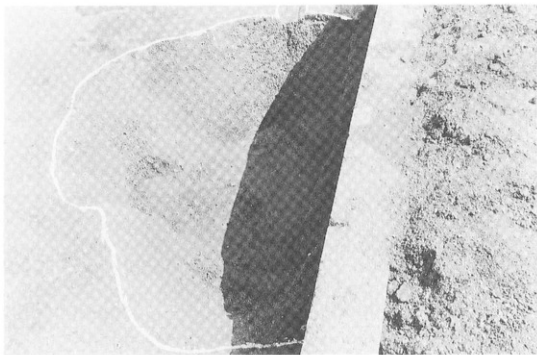
SK01 土層断面



SK05 土層断面

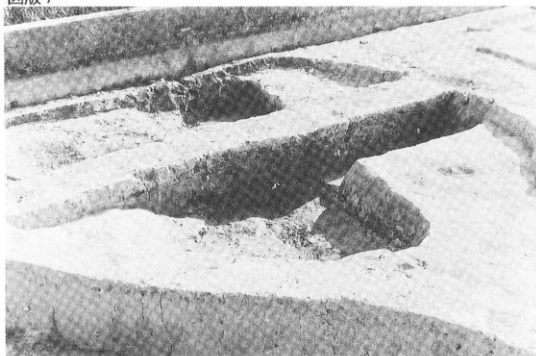


SK06 土层断面

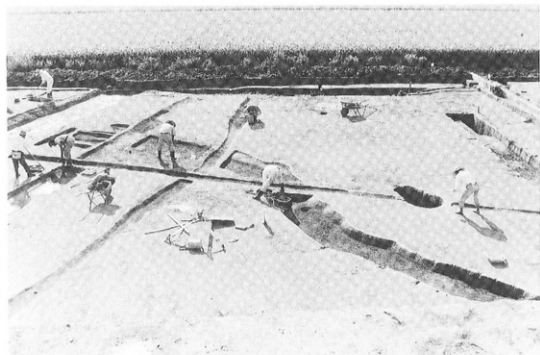


SE01 壳层状况

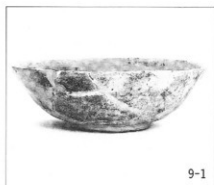
图版 7



SX01 完掘状況



作業風景（完掘撮影前清掃）



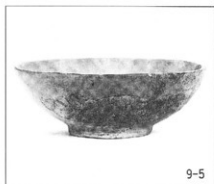
9-1



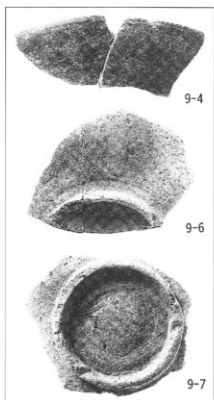
9-2



9-3



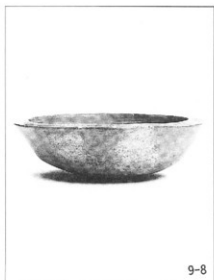
9-5



9-4

9-6

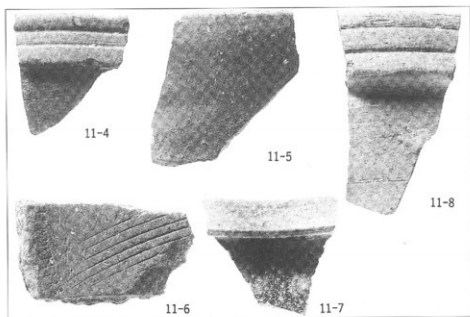
9-7



9-8

SD03 出土遺物

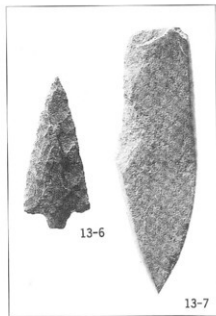
図版 9



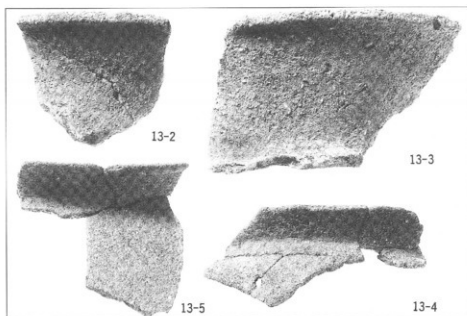
SD04 出土遺物(1)



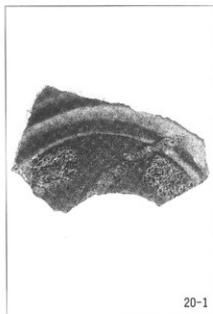
SD04 出土遺物(2)



SD05 出土遺物(1)



SD05 出土遺物②



SK01 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	くうこうあとちいせきかののまちちくに							
書名	空港跡地遺跡（亀の町地区Ⅱ）							
副書名	高松南部農業協同組合林支所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第28集							
編集者名	山本英之							
編集機関	高松市教育委員会							
所在地	〒760 高松市番町一丁目8番15号				TEL0878(39)2636			
発行年月日	平成7年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド 市 町 村 遺跡番号		北 緯 "	東 経 "	調査期間	調査面積	調査原因
くうこうあとちいせきかののまちちくに 空港跡地遺跡 （亀の町地区Ⅱ）	あまがけはんがたがふし 香川県高松市 ひめがちまろ 林 町	37201		34度 17分 36秒	134度 4分 49秒	19940809～ 19940922	800㎡	農協支所 建設
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
空港跡地遺跡 （亀の町地区Ⅱ）	条里遺跡 集落遺跡	弥生後期 平安時代 近世	条里坪界線 3本 弥生溝状遺構 1本 近世掘立柱建物 1棟 近世土坑 5基 他		大型石鏝 1点 磨製石斧 1点 瓦葺板黒色土器片 7点 近世播鉢片 5点 他			

空港跡地遺跡（亀の町地区Ⅱ）

高松南部農業協同組合林支所
建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

1995年3月

編集発行 高松市教育委員会

印刷 株式会社 成光社